令和３年　２月１１日

今日のシライ中

白井の愉快な仲間たち　　VOl.39

くれなゐの

　昔から、「春は名のみの風の寒さや」とか、「三寒四温」とか、「春」は何かと気温の上下が気になる季節ですね。まだ寒さの厳しい日もありますが、そうはいっても、やはり「春」。冷たい空気の中にも、その芯に「春」の「熱」が感じられる日も増えてきました。校庭の満天星つつじ（何て読みましたか？正解は…どうだんつつじ！）や、紫陽花（何て読みますか？もちろん、あじさい！）の枝先にも春の訪れを今か今かと待つ「芽」がたくさんふくらんでいます。その横を通るたび、「何で芽は赤いのだろう？」と不思議が頭をもたげます。そこで、今回は、この「芽」の色にまつわる話です。

　皆さんは、「芽」と聞くと、何色を想像するでしょうか？葉っぱのイメージがあるので、「緑色」ではないですか？ところが、実際の「芽」は、「赤色」であることが多いのです。「何で？」どこかの局の５歳児にきかれてしまいそう！あの「赤色」は、たぶん「アントシアニン」という色素の色だとは、想像できますね。でも、なぜ「芽」は、「赤色」なのでしょう。それは…「芽がまだ赤ちゃんだから～！」ん？実は、春先の「芽」は、未熟で、太陽光の強い紫外線を上手に防ぎきれません。私たち人間も同じですが、強い紫外線が生み出す活性酸素によって、害を受けてしまうのです。（真夏の日焼け！あのヒリヒリです！）こんな強い刺激に、「赤ちゃんの芽」はまだ耐えられません。そこで、この紫外線をアントシアニンに防いでもらっているのです。そうこうしているうちに、葉の中の緑色の色素「クロロフイール」が十分に育ち、紫外線に対抗できるようになると、アントシアニンの色は消え、「緑色」の葉となり、光合成をおこなえるようになります。どうですか？あんな小さな「芽」一つとっても、植物の生き残り戦略が発揮されているのです。さぁ、こんな身近な疑問にも、答えてくれる素敵なサイト「日本植物生理学会のＱ＆Ａ」コーナー。そこには、「砂糖水にネギの根をつけてみた　実験」をした小学生の質問も寄せられていました。で、どうなったと思いますか？なんと、根は「赤色」、アントシアニンの色を発色したのです！「なぜ？」気になった人は、調べてみてください。大変面白い実験結果で、私は、びっくりでした！

どうだんつつじ

あじさい

「くれなゐの　二尺伸びたる薔薇の芽の　針やはらかに　春雨のふる」（正岡子規）

　二年生の国語の教科書に載っている子規の有名な短歌です。写実に長けた（何て読むと思いますか？…正解は、たけた　です。）歌人の目は、春先の柔らかな雨と、くれなゐの薔薇の芽の情景とを瑞々しく映し出します。さぁ、白井の愉快な仲間たちが、にぎやかに動き始める「春」まで、もう少し。学校の行き帰りの道端にも、きっと「春」が顔をのぞかせているに違いありません！探してみてね！